モデル事業名	「伝承芸能の機能を活かした集落の賑わい創生」モデル事業
活 動 団 体 名	特定非営利活動法人佐渡芸能伝承機構
ホームページ	http://（活動団体のＨＰのアドレス）
所属／ 担当者名	ご担当者氏名（お問合せ先）　事務局/松田幸子
連絡先	080-6634-3423　　sadomaturi@yahoo.co.jp
活　動　地　域	新潟県佐渡市

●　活動地域の概要

①総人口の推移　　昭和 60 年 81,939 人→平成 19 年 65,267 人（平成 22 年 10 月現在 64,044 名）
②年齢別人口割合　0～14 歳 11.6%　15～64 歳 52.5%　65 歳以上 35.9%
③高齢単身世帯割合　13.07%（全国平均 7.88%）
④714 行政区のうち、115 行政区（全体の約 16%）が 65 歳以上の高齢者が半数を超えている。
⑤伝承芸能が行われている祭りの数　約 120
　芸能の伝承団体数　159(一つの祭りに複数の団体がある場合があり総数は祭りの数を超える）

●豊岡集落の例に見る佐渡市の現状
　豊岡集落は、30 世帯 77 名（内 65 歳以上 49 名、高齢化率 63.6%）の集落
　少子高齢化にもかかわらず、祭りを絶やしたくないという想いから、鬼太鼓は伝承され『門付け』が現在も行われている。しかしながら写真右の『大獅子』は人で不足の為、舞うことができなくなり、動き・唄の伝承が途絶えてしまい、残っている祭具を持って、各家をまわるだけとなってしまっていた。

●　活動地域の課題

　各地域に残る価値ある伝承芸能が、少子高齢化による人手不足により、活動縮小などを余儀なくされている。その結果、人と人とのつながりも途絶え、集落活動全体が停滞してしまうという悪循環に陥っている。佐渡における『祭』は集落の集大成であり、芸能の稽古を通して世代から世代への芸能の引継ぎ、集落運営のノウハウの継承など様々な面で、コミュニティの維持と活性化に大きく寄与している。
多くの地域が持っている独自の伝承芸能の価値を地域自身が再発見し、集落活動の低下を招く悪循環をいかに断つかが課題となっている。

●　活動の内容

（全体）
　祭りの時期を中心として、大学生を集落に受入れ、伝承芸能の稽古・祭りの準備などを通してコミュニティづくりに参加してもらう。
　1.集落外から祭りの時期を中心に対象地域に入りコミュニティづくりに参加する為のコーディネート
　　集落の課題や要望などを確認する為に集落に足を運ぶことを続けた。また、受入に前向きな大学を訪問し日程の調整や、事前に集落と学生の打合せの場を設けることなどを行った。
　2.集落外から対象地域に入る団体の募集　　受入対象となる大学の訪問
　3.佐渡島内の受入集落の募集　　集落へ出向いて説明。
　これらの活動において学生受入という成果も大切であるが、事業の提案によって集落内で自分たちの持つ資源を認識しそれを活かすための方策が話し合われることが集落機能の維持に寄与すると考えられる。

（直近１年間の進捗など）
　昨年度までの受入集落への継続した交流への支援を中心とした活動を行う。

●　活動の成果

・全体

受入実績

平成 20 年度　1 校 1 集落　　新潟大学→黒根

平成 21 年度　3 校 5 集落　　新潟大学教育学部森下ゼミ→豊岡集落

アメリカ・パシフィック大学→羽吉集落

相模女子大学英米文学科鈴木ゼミ→高千地区

新潟大学教育学部→黒根集落

新潟大学教育学部→関集落

【平成 21 年 8 月　たかち芸能祭
相模女子大学学生　鬼太鼓披露】

一昨年の黒根集落の祭りの参加をモデルケースとして、稽古期間も含めた交流が実施された。活動地域の概要の欄で述べた豊岡集落では大獅子復活という目的もあり、学生だけでなく周辺地域の住民も手助けを行った。

・直近１年間の成果など

受入実績

①継続した大学との交流

・新潟大学教育学部森下ゼミ→豊岡

昨年に引続き、ゼミで参加。稽古期間 5 泊 6 日（春休み利用）

祭り期間 2 泊 3 日

・相模女子大学英米文学科鈴木ゼミ→高千

「たかち芸能祭」に参加

芸能祭をはさんで 3 泊 4 日滞在。

②卒業生の参加

・新潟大学卒業生→黒根

学生の頃より継続して本年度で 3 年目の参加。

【H22 年 3 月
豊岡祭り鬼太鼓の稽古】

【H22 月 4 月
豊岡祭り　大獅子門付け】

波及効果

・豊岡地域おこしの会の活動に、新潟大学教育学部学生が参加。

竹を使った地域おこしを手伝う。

・相模女子大学と佐渡市との包括協定に向けて調整中。

●　今後の課題及び展望

①課題（活動を通して発見された課題等を記入）

・佐渡の春祭りの時期が、大学の新学期と重なり日程調整が難しい。

・芸能の稽古を含めての交流を望んでいるので、滞在費・交通費など金銭面の負担が大きい。

・それぞれの集落によって、祭り及び集落運営のやり方などが違い、モデルケースは提示できるがひな形という形では対応できない。形からではなく、集落と協議していく上で活動していくことが大切である。

また、それによって人が育つので丁寧な対応が必要となってくる。

②展望（今後の取組みや検討について記入）

・本事業を通して広い視野を持つリーダーが育てば、将来的には多岐にわたる人的交流を図っていくことができる。

・上記課題の解決の為にも、集落、大学、行政機関などとの連携がますます必要となってくると考えられる。より地域の為となる交流を促進していく為に適切なコーディネート作業を各方面と連携して行っていかなければならない。

・本事業を通じて培った人との交流を生かして発展的な活動を継続していくことが求められる。

●　その他（自由記述）

・継続した交流が、波及効果を生んでいった。続けていく為にどのような援助が必要か考えていかなければならない。

・本事業の説明を大学などに行った際、教育効果などについては理解を得られたが、佐渡の祭り・芸能について詳しく知られていない為、うまくイメージが伝えられなかった。多方面と協力して従来の観光案内とは違う佐渡を売り込んでいくことが本事業だけでなく佐渡の地域力アップにつながるのではないかと思った。

・継続して参加の大学については佐渡島内での移動等のフォローを行った。しかし資金がないことから新たな大学への案内などは行えなかった。卒業生や個人的に知り合った学生などに声をかけて祭りへの参加を依頼するしかなかった。地域で伝承されている芸能や祭りの再認識が重要だといわれているが、対価を得ることが難しくある程度の資金的な援助がなくては、活動の幅がせまくなってしまう。個人のつてとボランティアにたよる活動になってしまう。